かなか出版の運びにはならなかった。そこで、友人の伸に、虚子と話し合うよう頼んだのである。

しかし、結局、この日記は、出版されなかった。前出の伝記には「板倉村の宮下某が、出版して金儲けをやるのだろうと侮辱の言を吐いたため、道人は激怒し」とあり、出版の取り止めは、八一の側にあったようになっているが、出版社の側にも何らかの理由があったのかもしれない。

四、

周知のように、この二年後（明治四三、九）八一は針村の有恒学舎を辞して上京、早稲田中学校の教師になる。そして、「着任、まもなく早稲田大学の文学会で、一茶についての講演をおこない、恩師坪内逍遥はじめ抱月、その他の人人に感銘を与え、恩遇にむくい、面目をほどこした」（前出）という。そのとき、講演を聞いた「その他の人人」の中に御風もいた、という。

ただ、この「早稲田大学」の「文学会」については、明治四十三年十二月号の早稲田文学彙報欄「文芸消息」に「◎早稲田大学文学会創設」のことは載っているが、「文学会」のことは、同誌、九、十、十一月号には一切報じられていない。

いずれにしろ、この発表が契機となって、八一の一茶研究の論文が「早稲田文学」に載ることになる。この掲載にあたって、八一と御風の間に交信があった。それによると、早稲田文学掲載は、御風の意向によるもののようである。

日前は貴書正に拝承　一茶論のうち略伝の部本月中脱稿　御目にかけ可申候　紙数は先づ二十枚位と御承知おき被下度候　委略はあとよりなほ〳〵　turgenev　貴訳は正に落手のよし　先日伊達氏よりたより有之候　令閨へよろしく

（八一、御風宛書簡、明治四三・十一・二六）御風の問い合わせに対する八一の返信である。

五、

八一の「俳人一茶の生涯」は、明治四十四年（一九一一）一月号の早稲田文学に掲載された。

論文は「一茶を観る世間の人の眼は久しく間違って居ました。」から始まる。

そして、「一茶観の差異、変遷」について、春秋庵幹雄の「風流人」説、岡田虚心の「老荘の学に造詣深き儒者」説、岡野知十の「生類に及ぶ強烈なる同情心は仏法の戒律」の結果説など。諸説あるのは、一茶の「史伝」が世に知られていないことと、「句集の読み方」の違いによる。

ただ、友人束松露香の『俳諧寺一茶』は讃嘆すべき著述で、ここではこの露香の資料をもとに、私見を述べたいと。

以下、一茶の履歴が、年譜的に述べられる。

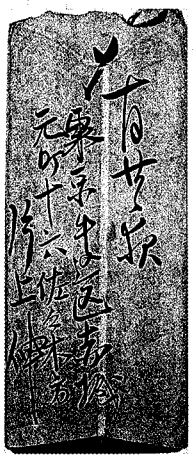
まず、一茶が生まれた信濃柏原の気候、風土が、「一茶自身の性格に及ぼした影響」――一種の心の淋しさ、根強さ自然に親しむ心と自由を希ふ心――が生得の性格として認められる、という。

継母の虐待については、「痛ましい影響を与へた事は動かし難い」が、それ以上に「柏原の自然」が彼の性格に影響している。

一茶は上京十年にして「葛飾派の俳人」として世に出ながら、数年にしてそれを脱し、交を絶って旅に出ている。この旅行の「裏面には必ず、一種悽愴たる心理」が伴っており、「旅行は悲哀の思出」だったのではないか、と。

晩年の一茶は、「並々ならぬ意地悪き運命に囚はれて其玩具となった」ように見える。

柏原に帰って、継母、義弟との確執、そして五十二歳にして初めて迎えた妻が悲劇の第二幕の始まりであった。子供の夭逝、妻の死、後妻の出奔、そして、家の焼失。



こうしてみると、一茶を「俗塵を離脱した仙人」などとみるのは「明瞭に世間の誤解」であることが分かる。

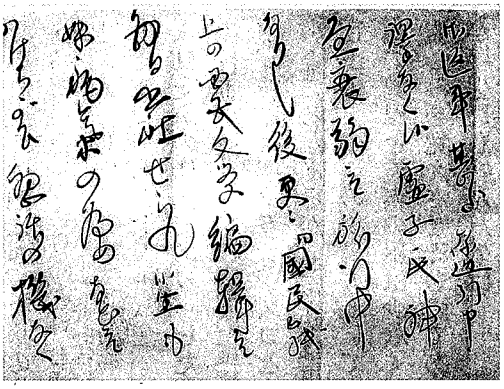
また、一茶に「滑稽の句」があるからといって「滑稽家を以て目し去るのは「浅薄」で、「一茶の大詩人たる真面目の別に厳として存するを認識」しなければならない。

六、

論文「俳人一茶の生涯」は、御風に約束した、四百字詰、二十四枚。文章は、「です」「ます」の敬体で分かり易い。

当時としては出色の一茶論で、会津八一の名が、この一茶研究・論文によって中央で知られることになった。そして、自分が発見した一茶の日記を「出版」することは、それを保証するものであったと考えられる。

今回公開された片上伸・天弦の八一宛書簡は、今までよく分からなかった出版に関するその間の事情を明らかにするものであって、貴重な資料である。



會津八一宛片上伸書簡
（明治41年10月21日付）